

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 18 日現在

機関番号：32414

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K02867

研究課題名(和文) 教職課程におけるキャリア形成を促す「学校インターンシップ」のカリキュラム開発

研究課題名(英文) Curriculum Development of Initial Internship Program for Career Progression in Teacher-Training Course

研究代表者

山本 礼二 (YAMAMOTO, Reiji)

目白大学・人間学部・客員研究員

研究者番号：00611154

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：我が国では、大学等の教員養成課程において「教育実習」が課せられている。この教育実習について、教育職員免許法の改正により「学校インターンシップ」(学校体験活動)を含むことが可能となったが、内容については各大学の裁量に任されている現状にあった。本研究では、教職キャリアの連続性を促すキャリア形成を促す学校インターンシップのカリキュラムを作成することを目的に研究した。そのために、学生、教員、教育委員会へのインタビューや、他大学事例調査、国際動向等をまずは調査し、学校インターンシップに求められる要素を明確にし、カリキュラム案を作成した。その後2度の実践を行い、最終的なカリキュラムの成案を完成させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

当該研究の成果として作成した「学校インターンシップカリキュラム」は、各大学等において実施される学校インターンシップ、学校体験活動で、どのような要素を学生に体験させることが重要か、どのような要素を学生に体験させることで、その後の教員キャリアにつなげることが出来るか、明確に示していることに意義がある。目的意識や体験の視点を明確にして、学校体験活動に取り組み、その目的や視点に従って振り返りをするためのツールとして、当該カリキュラムは有効である。

研究成果の概要(英文)：Revisions to the Teachers' Certificate Law have made it possible to include school experience activities as part of the teaching practice. However, the content of the internship was left to the discretion of each university. For these reasons, the researchers carried out a study with the aim of creating a school internship curriculum that takes into account the continuity between the teaching curriculum and the teaching career for students, and that also promotes the formation of career awareness in students.

To achieve this objective, interviews with students, teachers and school boards, case studies of curricula at other universities and research on international trends in teaching programmes were conducted. Based on the results, the required elements of a school internship were clarified and a curriculum proposal was developed. Subsequently, two practice sessions based on the draft curriculum were carried out and the final draft curriculum was completed.

研究分野：教育工学

キーワード：教員養成 カリヤ形成 カリキュラム 学校インターンシップ 学校体験活動

1. 研究開始当初の背景

新たな知識や技術の活用により社会の進歩や変化のスピードが速まる中、教員の資質能力向上は我が国の最重要課題であるとされている。平成 24 年 8 月の中央教育審議会答申では、学校が抱える多様な課題に対応し新たな学びを展開できる実践的な指導力を身に付けるためには、教員自身が探究力を持ち学び続ける存在であるべきであるという「学び続ける教員像」の確立が提言された。また、平成 27 年 12 月の中央教育審議会答申では、これからの時代の教員に求められる資質能力が示され、文部科学省は、あるべき教師像として「教職に対する強い情熱」、「教育の専門家としての確かな力量」、「総合的な人間力」の 3 要素を挙げた。これを基盤としながら、採用から研修まで一貫して行う教育委員会では求める教師像が定められており、それぞれのニーズを踏まえた教員養成が各大学において求められている。さらに、教職を志望する学生が部活動や事務作業など授業以外の活動に触れることで、早い時期から仕事の実態を把握し、自分の適性を判断できるようにして、教員の資質能力を向上させることを目的に「学校インターンシップ」(学校体験活動)の導入も提唱されていた。このことを踏まえて、早期から教員キャリアを見通して、幅広く資質能力を向上させていくことが必要とされているという研究当初の背景があった。

そのような中において、研究代表者の大学(目白大学)では、いち早く「学校インターンシップ」にあたる実習を行っていた。平成 22 年より教職実践科目「教育実習」にて、大学が地域連携協定を結んでいる区域の小学校で大学 2 年次生に観察実習を実施してきた。観察実習の成果として、将来希望する小学校教員という職業を知る良い機会であり、学校教育や教員志望意識に高まりが見られ、キャリアを方向付ける上でも効果があると報告されている。一方で、希望する校種と異なる学校での実習は効果が低いことが課題として挙げられ、目指す校種での実習の重要性が示唆されている。先行研究においては、教職意識の形成や実践的知識の獲得のために現場での経験が重要であることも報告されている(西松 2008、久保 2011、細谷ら 2012)。さらに、教育実習の不安は男女で異なることが言われており(西松 2008)、自己効力感の低い学生、とりわけ女子学生で教育実習不安が大きいことも明らかになっている。教職志望学生の不安軽減は、大学機関にとって課題の一つともいえる。以上のことから、早期の現場での経験は教員としてのキャリア形成につながるだけでなく、教育実習不安の軽減につながることを期待できるため、「学校インターンシップ」を効果的に導入することには意義あることだと、我々は考えた。

2. 研究の目的

当時は「学校インターンシップ」(学校体験活動)の具体的な内容については法令等で定められておらず、教職課程のある各大学の裁量に任されているのが現状であった。そこで本研究課題では、「学生のキャリア形成を促す「学校インターンシップ」のあり方とは何か」という問いを掲げ、教職志望学生および教育機関、教育委員会など多方面から「学校インターンシップ」のあり方を検証し、実践的指導力の基礎の育成につながるカリキュラムを開発することを目的とした。

本研究の大きな特色は、新たに導入された「学校インターンシップ」に着目し、充実した学校インターンシップによる教師の資質能力の向上を目的に、教職志望学生だけでなく教育機関や教育委員会の要望や現状を考慮した学校インターンシップカリキュラムを作成し、介入研究を実施することである。教育実習に関する研究は多くみられるが、学校インターンシップに着目し、多面的にその役割を明確にしていく本研究課題は他に例を見ない。さらに、複数の地域において調査をすることで地域差を考慮した学校インターンシップのカリキュラムを開発することができる。そして協力の得られた各大学において介入研究を行い、教職志望学生の他者理解・自己理解に関する変容に関する項目および学生と各学校の教職へのコミットメントの変化を調べることで、介入の効果検証を行うことが可能となる。「学校インターンシップ」に関する情報を多方面から集約し、共通性や地域性を見出し新たなカリキュラムを作成していく研究は乏しく、本研究課題は、より質の高い教員を養成する取り組みとして、貴重なエビデンスとなり得ると考え、研究を進めてきた。

3. 研究の方法

最終的な目標を「カリキュラム開発」とし、その前提として調査研究、実践研究等を通じ、研究を進めてきた。以下、各年度に行った研究について概要を述べる。

1 年目となる 2018 年度は、カリキュラム開発の前提となる基礎的なデータ収集を主に行った。具体的には、まず調査として、保護者に対する質問紙調査、学生に対する質問紙調査、教員及び教育行政に対するインタビュー調査を行った。それぞれの要望やニーズから、教育実習前に行う学校インターンシップ、教育実習後に行う学校インターンシップそれぞれの位置づけの差の検討や、必要な内容の違い、またその精査を行うことが出来た。特に、適性という側面も極めて重要であることを見いだしており、単に教員養成の一段階としてのインターンシップというだけでは無く、教師像を具体化しながら教師に必要な資質・能力を身につけていけるかどうか、というメタな視点に着目する必要性も明らかにした。

また、政策動向についても研究を行い、学校インターンシップの位置づけに関する政策科学的な分析も行った。具体的には、日本及び諸外国の教員養成に関する実態についても把握するため、教師教育に関する近年の国際政策動向として、OECDが行った初期教員準備（ITP）に関する動向や、制度の変遷と教師の在り方の変化等についても研究を進めた。

2年目となる2019年度は、1年目に行った学生対象のニーズ調査、現職教員・指導主事等へのインタビュー調査、大学への調査票調査を取りまとめた上で、研究発表を行うと同時に、先行事例として国内大学のカリキュラム等の調査、OECD等の動向等をさらに整理した。これらの研究を総括し、4領域・5大項目の学校インターンシップカリキュラム案(いわゆるVer.1)を作成し、2020年1月に実際に小学校において4名の学生が、学校インターンシップカリキュラム案を活用した学校インターンシップのプレ実施を行った。

3年目となる2020年度は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響に伴い、予定していた「プレ実施2回目」を実施できなくなったことから、一連の研究成果を振り返り、カリキュラムの再検討を中心に進めた。基礎的な調査研究と、その調査研究をもとに作成した「学校インターンシップカリキュラムの作成」及び「プレ実施」の振り返りと点検から、改善したカリキュラムを作成した。これが、改良した学校インターンシップカリキュラム案(いわゆるVer.2)である。

4年目となる2021年度は、上記で作成したVer.2のカリキュラムをもとに、2021年9月に「プレ実施2回目」を4名の学生が実施し、得られた結果から学校インターンシップカリキュラム(いわゆるVer.3)を作成した。また、成果について国内学会発表、国際学会発表を行い、また最終報告書の取りまとめを行った。

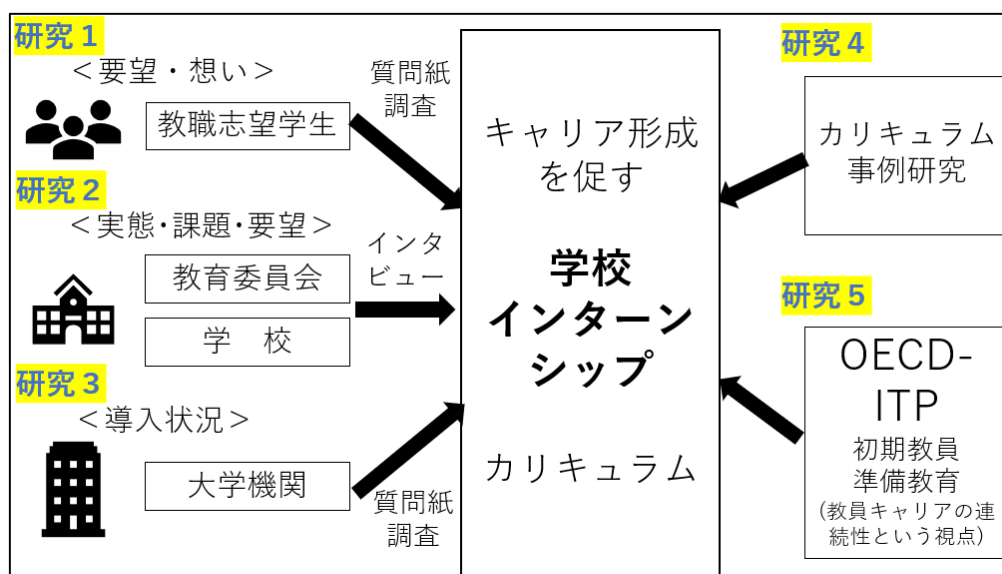


図1 本研究の一連の関係

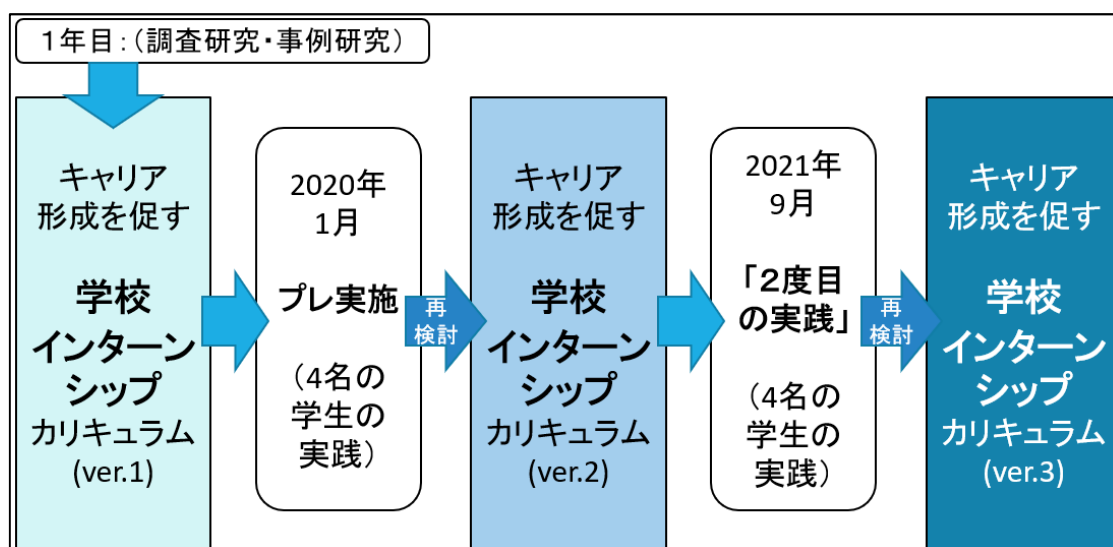


図2 本研究における「実施・実践」とカリキュラムの展開

4. 研究成果

基礎的な調査研究としては上記の通り、5つの視点で進めてきた。1つ目に、学生を対象とした調査で、都内A大学で実施していた観察実習に参加する2年次生を対象としたアンケート調査を行い、学校体験活動に対する要望やニーズに関して調査した。2つ目に、現職教員や指導主事等へのインタビュー調査で、教育実習における現状の成果や課題、学校インターンシップへのニーズに関して聞き取りを行った。3つ目に課程認定を有する大学への調査票調査で、現時点で「学校を体験する活動」をどのような目的や位置づけで行っており、どのような成果や課題があるのかを明らかにした。4つ目に、国内におけるカリキュラム事例の調査で、本研究では特にキャリア形成という視点から教育実践のカリキュラムを構成している上越教育大学(2007)の教育実習ルーブリックや、兵庫教育大学(2012)の教員養成スタンダード等を参考に、教師としての資質・能力について検討をした。5つ目に、海外・国際動向として、OECDの初期教員準備(Initial Teacher Preparation: ITP)として行われた各国の制度的・政策的な教員養成アプローチの調査等から考察を行い、「養成前段階」における課題を見出した。

これら一連の学生、教員、大学という視点からの調査と、国内、国外という両面からの検討を踏まえ、本研究では「学校・教職を知る」「子どもを知る」ことに関する要素、「キャリア形成」を意図した要素、「社会性や礼儀やマナー」といった要素を盛り込んだ23項目のカリキュラム案を作成した(いわゆるVer.1)そこから、2020年1月の「プレ実施」、2021年9月の「2度目の実践」から、保護者対応に関して触れる機会が限られることや、コロナ下においてICTの活用が急速に広まったことから、その要素を具体的に取り入れるなどの改善をし、学校インターンシップカリキュラム(いわゆるVer.3)の作成に至った(峯村・山本ら2022)。

領域	大項目	中項目	小項目
課外活動も含め、多様な学生生活の中で身につけさせたい領域	大学のキャリアで育成すべき領域 教職課程の領域 教育実習校の理解に関する事項	観察及び参加と省察	1. 自ら課題意識をもって主体的に参加し、体験や経験を振り返ることができる
			2. 常に自らを省察し、課題を見つけて改善することができる
			3. 発達や特別支援教育に関する基礎的知識を踏まえ、年齢、特性、障がいなどによる子どもの違いを観察できる
			4. 特性や障がいがある子も含め、どんな子にも不得意があることに気づき、またどんな子にも良さや役割があることに気づける
			5. 教室掲示や座席配置など、子どもが生活や学習しやすい教室環境の工夫を観察できる
			6. 学校生活の様々な場面で子どもの興味・関心・意欲を喚起するための工夫を観察できる
		観察及び参加と省察	7. 学級担任の役割と学級指導の様子を観察し、学級での教師の在り方について考えることができる
			8. 授業における教師の役割と学習指導の様子を観察し、授業での教師の在り方について考えることができる
			9. 学齢に沿った子どもの基本的な生活習慣を踏まえて、学校での生活の様子を観察できる
			10. 板書、発問、指示の仕方など、授業や指導を行う上での基本的な指導技術を観察できる
			11. 学習内容の習熟度などを踏まえて、個に応じた指導の必要性を理解する。また可能な範囲で補助ができる
			12. ICT(情報通信技術)を活用した学習指導について、その実態を観察する。また可能な範囲で補助ができる
			13. 何故教職を目指すかについて考えを整理し、目指す教師像について、目標や見通しを考えることができる
学習指導及び学級経営に関する事項	学習・授業・学級経営への理解	14. 目指す教師像に向けて自らが今後どのような学修や経験をすることが必要か考えをもつことができる	
		15. 教師としての役割と職務内容について理解するとともに、その使命感について考えをもつことができる	
		16. チーム学校の姿として、先生同士のつながりの大切さやそれぞれの先生に役割があることを理解している	
		17. 服装、マナー、言葉遣い、挨拶、礼儀など、他の模範にもなれる社会人としての常識に沿った行動を意識できる	
		18. 時と場合に応じた言動を身につけており、他の模範にもなれる、言動について考えることができる	
		19. 必要な場面に応じて素直な気持ちで周りの大人に相談することができる	
		20. 周りの大人の意見に対して謙虚に耳を傾けることができる	
教員の役割・教員の職務内容・キャリアに関する事項	教職の意義・教員の役割の理解	21. 自らのストレスと身体の健康を適切に自己管理することができる	
		22. 子どもに対して正しくわかりやすい言葉遣いを意識できる	
		23. 公平かつ受容的・共感的態度をもって子どもと関わろうと意識できる	
		24. 子どもとの信頼関係の重要性を理解しその構築のために必要なことについて考えることができる	
		25. 様々な場面で自分ができそうなことを積極的に手伝おうとし、先生方と協働しようとする姿勢を意識できる	
		26. 気になったことを他の実習生(学生)や他の先生に伝えあい共有し、様々な子どもの状況を理解しようとする	
		27. 特に情報モラルの面から、ICT(情報通信技術)の特性を踏まえ、自らの利用を律することができる	
大学生として身につけるべき技能・態度・技術	自らの資質・能力の陶冶	28. 学校全体でのICTの整備状況や利用場面などを観察し、活用の良さや課題について考えることができる。	
		28. 学校全体でのICTの整備状況や利用場面などを観察し、活用の良さや課題について考えることができる。	
職業人たる教職特有の基礎となる技能・態度・技術	子どもと関わる資質・能力	ICT(情報通信技術)の活用とモラル	
		ICT(情報通信技術)の活用とモラル	

図3 作成したカリキュラム表

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 6件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 8件）

1. 著者名 峯村恒平・山本礼二・枝元香菜子・渡邊はるか・藤谷哲	4. 巻 20(3)
2. 論文標題 学校インターンシップカリキュラムの開発に向けた実践と検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 143-148
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 渡邊はるか・枝元香菜子・藤谷哲・峯村恒平・山本礼二	4. 巻 16
2. 論文標題 教職等履修学生の教育実践効力感の尺度開発に関する予備的研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 目白大学総合科学研究	6. 最初と最後の頁 141-147
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 峯村恒平・枝元香菜子・渡邊はるか・藤谷哲・山本礼二	4. 巻 26
2. 論文標題 教員養成課程における「学校を体験する」活動の取り組みと成果 各大学へのアンケートの結果から「学校インターンシップ」に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 目白大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 81-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 山本礼二・枝元香菜子・渡邊はるか・藤谷哲・峯村恒平	4. 巻 26
2. 論文標題 教育実習の課題と学校インターンシップのニーズ 小中学校・教育委員会へのインタビュー結果の分析から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 目白大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 107-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 峯村恒平・野村泰朗	4. 巻 17
2. 論文標題 教育改革と教員養成に対する保護者認識の検討 保護者を対象とした意識調査の結果から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要	6. 最初と最後の頁 85-92
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本礼二・峯村恒平・藤谷哲・枝元香菜子・渡邊はるか	4. 巻 25
2. 論文標題 教育実習 I (観察実習) での学びに関する一考察 学校インターンシップでの展開に向けて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 目白大学高等教育研究	6. 最初と最後の頁 107-116
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 藤谷哲・峯村恒平・枝元香菜子・渡邊はるか・山本礼二	4. 巻 15
2. 論文標題 教師教育に関する近年の動向と政策	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 目白大学総合科学研究	6. 最初と最後の頁 111-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 峯村恒平・山本礼二	4. 巻 13
2. 論文標題 学校制度と「時代の変化」と「教師の在り方」をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人と教育	6. 最初と最後の頁 61-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Satoru Fujitani, Kohei Minemura, Kanako Edamoto, Haruka Watanabe, Reiji Yamamoto	4. 巻 2021
2. 論文標題 Interns' perceptions of major advances in the use of information devices in elementary schools	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Proceedings of Innovate Learning Summit	6. 最初と最後の頁 315-318
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 峯村恒平・山本礼二・枝元香菜子・渡邊はるか・藤谷哲・多田孝志	4. 巻 2021-4
2. 論文標題 キャリア形成を育む学校インターンシップカリキュラムの開発と実践	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本教育工学会研究報告集	6. 最初と最後の頁 86-93
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計5件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 枝元香菜子・峯村恒平・渡邊はるか・藤谷哲・山本礼二
2. 発表標題 小中学校・教育委員会へのインタビューから見る教育実習における課題 - 学校インターンシップの展開に向けて -
3. 学会等名 日本学校教育学会第34回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 渡邊はるか・枝元香菜子・藤谷哲・峯村恒平・山本礼二
2. 発表標題 教職等履修学生の教育実践効力感の尺度開発に関する予備的研究
3. 学会等名 日本学校教育学会第34回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 山本礼二・枝元香菜子・渡邊はるか・藤谷哲・峯村恒平
2. 発表標題 キャリア形成を育む学校インターンシップカリキュラムの開発
3. 学会等名 日本教育工学会2020年春季全国大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 枝元香菜子・峯村恒平・渡邊はるか・藤谷哲・山本礼二
2. 発表標題 教育実習における課題 特別な配慮を必要とする児童・生徒の関わりに着目して
3. 学会等名 日本学校教育学会（第33回研究大会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本礼二・枝元香菜子・峯村恒平・渡邊はるか・藤谷哲
2. 発表標題 学校インターンシップのカリキュラム開発に向けた展望 教育行政・学校へのインタビュー結果に触れて
3. 学会等名 日本教育工学会（研究会19-1）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	藤谷 哲 (FUJITANI Satoru) (90331446)	目白大学・人間学部・准教授 (32414)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	渡邊 はるか (WATANABE Haruka) (80635219)	目白大学・人間学部・准教授 (32414)	
研究分担者	峯村 恒平 (MINEMURA Kohei) (50759371)	目白大学・人間学部・専任講師 (32414)	
研究分担者	枝元 香菜子 (EDAMOTO Kanako) (70758284)	金沢学院大学・文学部・助教 (33305)	
研究分担者	多田 孝志 (TADA Takashi) (50341920)	金沢学院大学・文学部・教授 (33305)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関